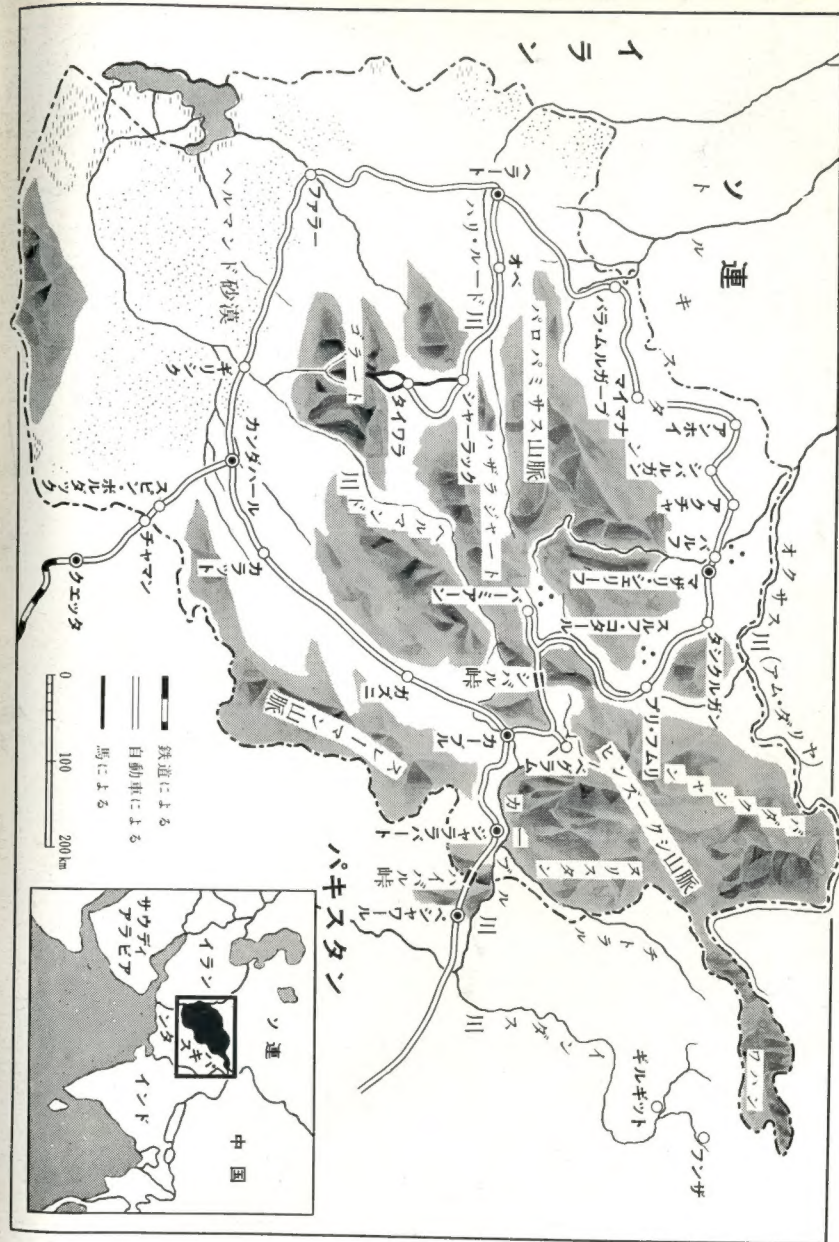
アフガニスタンの旅

岩波写真文庫　202

岩波写真文庫 202 アフガニスタンの旅
編集 岩波書店編集部 岩波映画製作所
監修 梅棹忠夫
写真 梅棹忠夫

一九五五年の京都大学探検隊の一員として、わたしは四ヵ月間この国を旅行した。これはそのときの見聞記である。内容の一部は映画「カラコルム」で紹介された。また中央山岳地帯におけるわたしの経験は、別に岩波新書「モゴール族探検記」にくわしく記した。ここでは国内一周旅行のアルバムをもとにして話をすすめよう。その自然と人間の概略を伝え得れば幸いである。

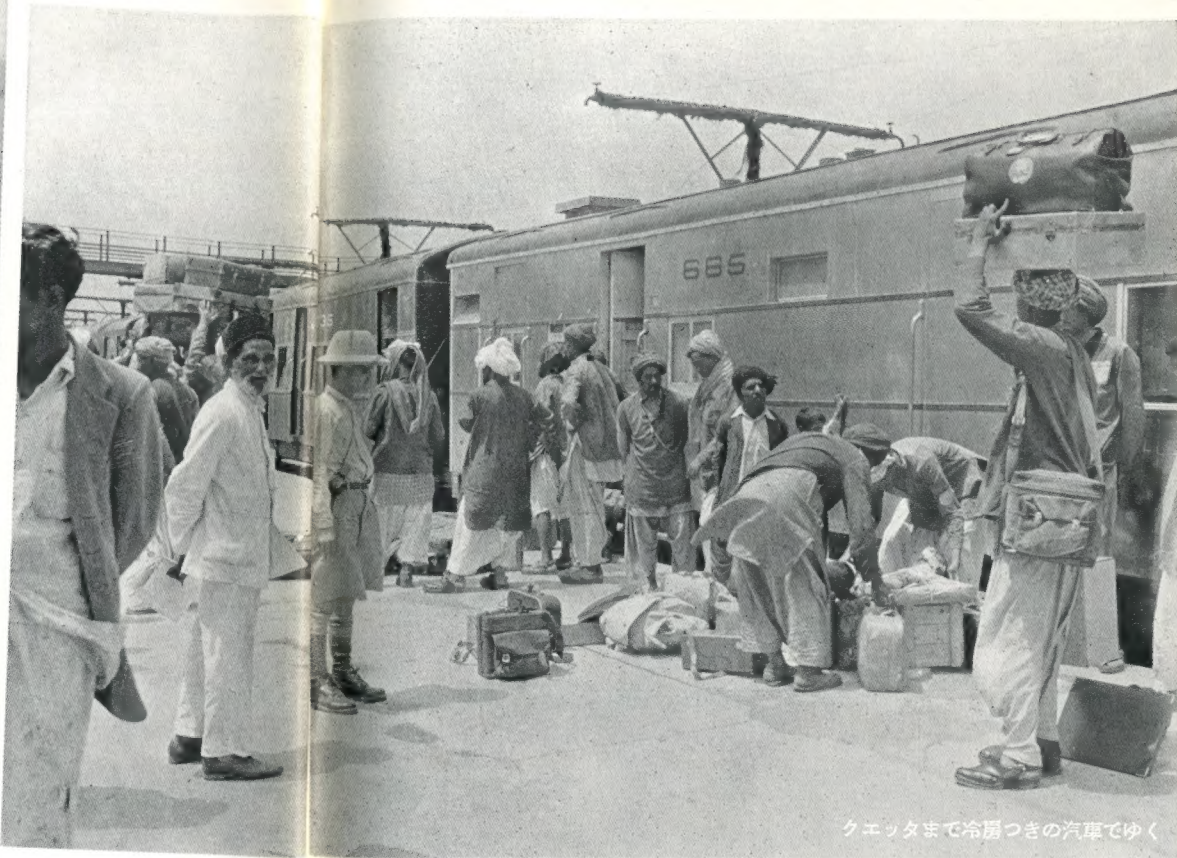
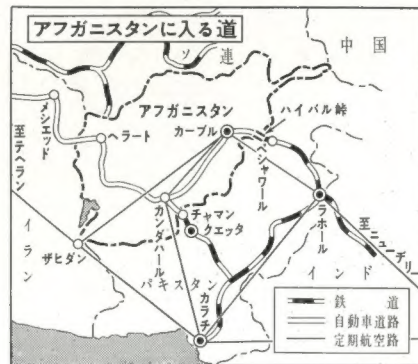
ベグラムの遺跡のほとり

定価100円 1956年10月25日発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

クエッタまで冷房つきの汽車でゆく

海のない国　アフガニスタンは、いろいろな点でわが国とは対照的である。日本は、どちらを向いても海だけれど、アフガニスタンには海がまったくない。この大陸国の人たちは、「海」ということばを聞いただけでも、何かロマンチックなあこがれを感じるそうだ。港をもたないことが、この国の開発をすすめる上に、非常な悪条件になっている。輸入物資はおもにパキスタン経由で入るが、そのパキスタンとの間に、しばしば紛争が起るのだからやりきれない。

ジープとトラックで国境に向う

国境は平原のまん中にあった

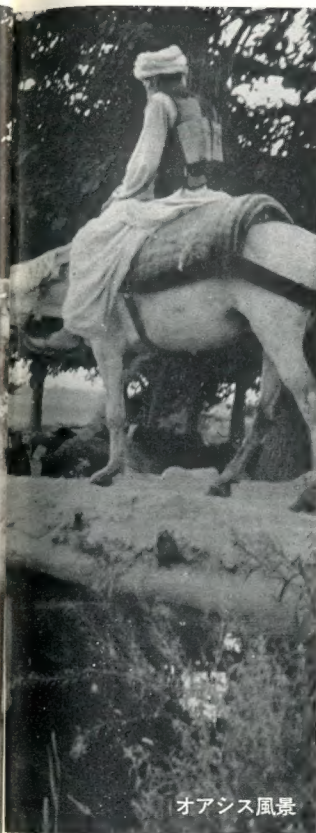
最初の都市カンダハールに入る

鉄道のない国　パキスタンから入る道は、ハイバル峠を越えるのと、クエッタ、チャマンを経るのと、二つある。どちらも国境までは鉄道があるが、アフガニスタン領に一歩入ると、輸送力はトラックかロバしかない。道路の悪いことにかけては、アフガニスタンと日本とは、アジアにおける両雄である。

この程度ならよほどマシだ

地面はヒビわれ、草はトゲだらけ

写真をとるため穴から出てもらった

砂漠　面積からいうと、この国は日本の二倍近くもあるが、人口は十分の一くらいだろう。国の中のそうとうの部分を、砂漠が占めているのだ。砂漠といっても、砂があるとは限らない。石コロの砂漠もあれば土の砂漠もある。要するに、ひどい乾燥のために植物の生え方がきわめて悪い土地のことである。地面があるというばかりで、ほんとにあんまり何もないので、ちょっとガッカリする。

乾燥ということ　とにかく、空気の乾いていること驚くべきものだ。日本製湿度計の計算表から外れてしまうので、正確な湿度は測れなかった。雨は四ヵ月間に二度パラパラと降っただけ。草も動物も、はげしい乾燥にたえるものだけが生きることをゆるされる。水なしで生きるリクガメを見つけたが、日中は暑さをさけて穴にかくれている。南アフガニスタンでは、暑いこともすてきに暑い。

ほんとに一木一草も生えていない

緑の絶景．別荘地になっている

村には必ず農業用水路が走る

街道の宿場もオアシスだ

オアシス風景

オアシス　水があって、緑のしげっているところがオアシスである。河のふち、泉のほとりにそれは発達する。カンダハールで、すばらしい景色と称する場所に二ヵ所案内してもらったが、どちらも広い河谷に木が生えているだけだった。われわれには珍らしくもないが、ここでは緑があるだけで絶景だ。

農業用水　オアシスには人が住んでいる。村があり、畑をたがやし、家畜を飼っている。農業用水は、えんえんと水路を掘って、泉や川から引いてくる。地上水路は蒸発しやすいので、昔から地下水路が発達している。カレーズという。いずれにせよ、水が生活の基本である。水なければ不毛の砂漠も、水あれば豊かな畑となる。最近、政府はアメリカからの借款によって、ヘルマンド河に巨大なダムをつくり、その水で砂漠を耕地に変える大工事を始めた。

地下水路には所々たて穴がある

宿場には木かげもあり店もある

街道と宿場　カンダハールから首府のカーブルに向った。アフガニスタンの東海道だ。ほこりだらけのデコボコ道で、三日かかった。いろいろな旅人が通る。ロバにまたがって足をブラブラさせているのは、近所へゆく百姓だろう。反物をつんでいるのは行商人だ。ラクダの列をひっぱってゆくのは、移動中の遊牧民である。ラクダの背につんだ家財道具の上に、子どもがのってゆられて行く。バス兼用のトラックが何台も走ってくる。運転台の屋根の上に座席があって、鈴なりに人がのっている。宿場にくれば、お客も運転手も下りて休む。宿場には、木かげがあり、水があり、茶店があり、雑貨屋があり、ひととおりの日用品を売っている。この国は果物の国だ。ぶどう、あんず、はたんきょう、りんご、なし、くるみなど、安くてうまい。大きい宿場には上流人士のために官営のホテルがある。庶民用の安宿なら、どこにでもある。

ホテルはすべて官営だ

遊牧民が移動してゆく

バス兼用のトラック

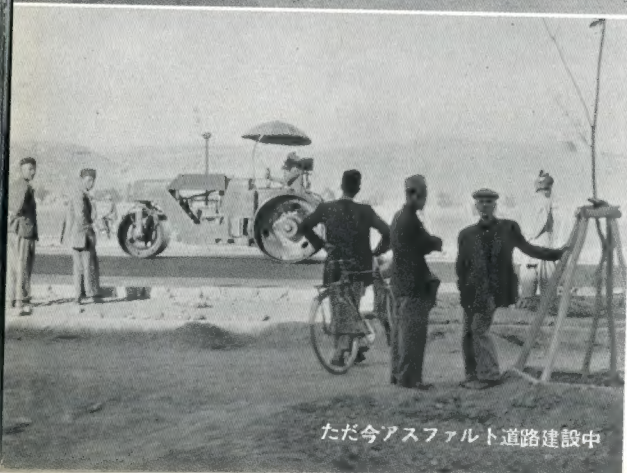
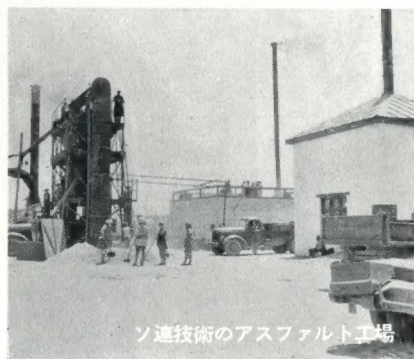
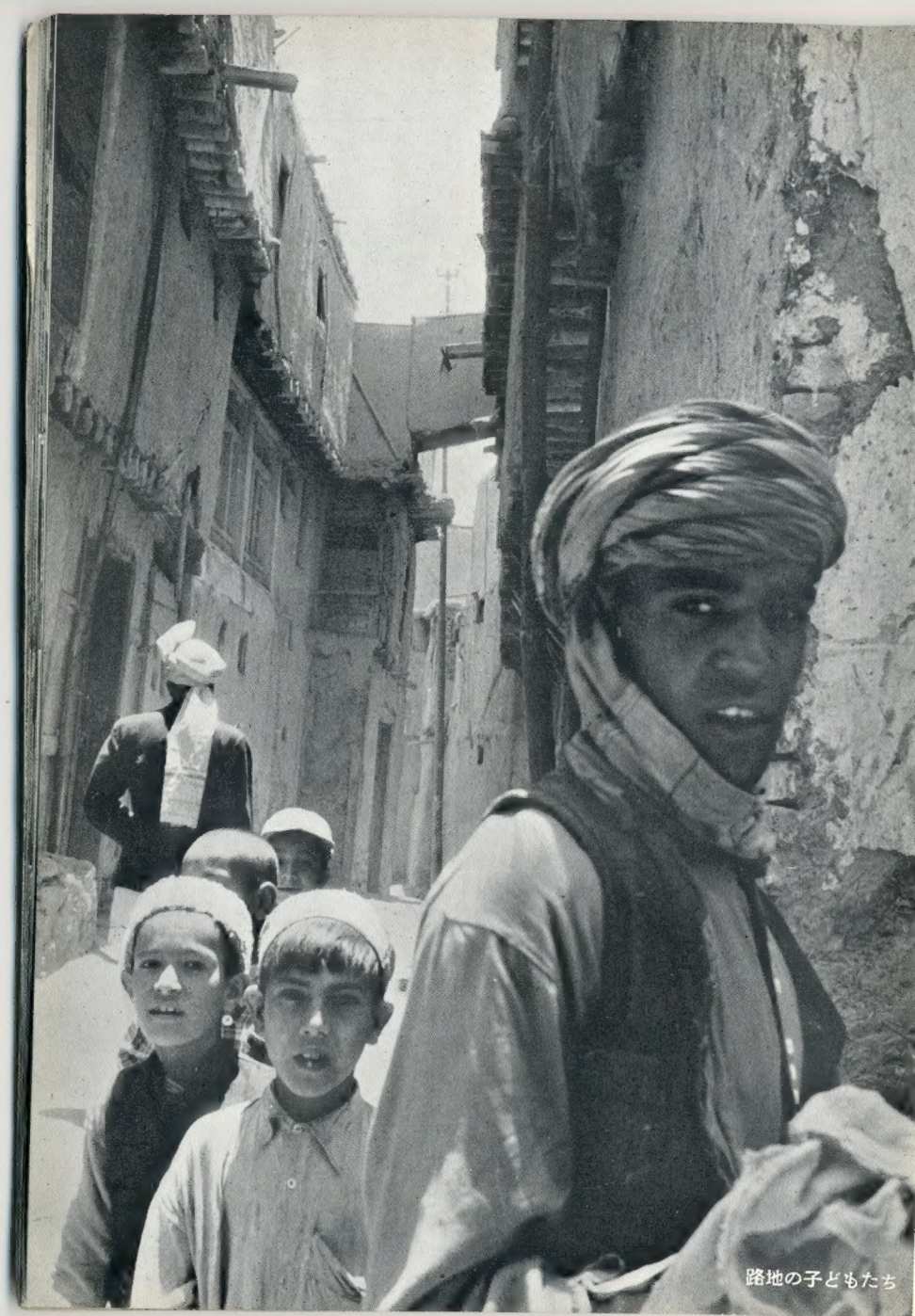
ロバに反物をつんでゆく行商人

カーブル市のビジネス・センター

首府カーブル　かわいらしい首府である。人口は二十万もあるだろうか。確かな統計はないようだ。小さいながらも一国の中心都市だ。ひととおり何でもある。王様がいらっしゃるから王宮もある。官庁、病院、学校、博物館、映画館もある。映画は主としてインドのものを上映している。何といってもまだ未完成の町だが、いま近代都市建設のさいちゅうである。水道を敷設し、アスファルト道路をつくりつつある。水道は、日本の技術者が指導している。

ソ連技術のアスファルト工場

目ぬき通りはなかなか美しい

カーブル川の橋. 後は市民病院

ただ今アスファルト道路建設中

アスファルトはソ連の技術だ。電気事業はドイツの一手販売。アメリカも中国もインドも、ここに大使館をおいている。日本のも最近できた。市電はないがバスは走っている。市民の重宝な足は、ホロつきの二輪馬車である。自家用自動車はかなり走っているが、タクシー業というものはなかったようだ。

路地の子どもたち

旧市街　カーブルの町は、新市街と旧市街にわかれている。新市街は官庁・住宅地域で、旧市街は商工業地域である。新市街は静かだけれど、旧市街には雑然たる活気がある。シナやインドの町に似ているが、いっそうゴチャゴチャしている。バザールの表通りには、ちゃんとした店がならび、品物も豊富である。問屋街もある。もっとも、ちゃんとした店といっても、けい光燈のついたショー・ウィンドウというわけにはゆかない。一歩裏町にふみこむと、ドロづくりの穴ぐらのような、小さな汚らしい店が、おしあいへしあいしている。鍛冶屋、くつ屋、仕立屋、まき屋、肉屋、銀細工屋、茶店、そのほか何だかえたいの知れぬ店。これはまさに産業革命以前の町だ。妙にとりすました安ぶしんの洋館街よりも、こういう雑ばくさに心ひかれるのは、旧世界の人間の郷愁であろうか。

バザールの表通り

バザールの裏通り

あいさつは抱きあい

町をゆく人，さまざまな風俗

露店．木の実，野菜，日用品

すわって休んでいるのかしら

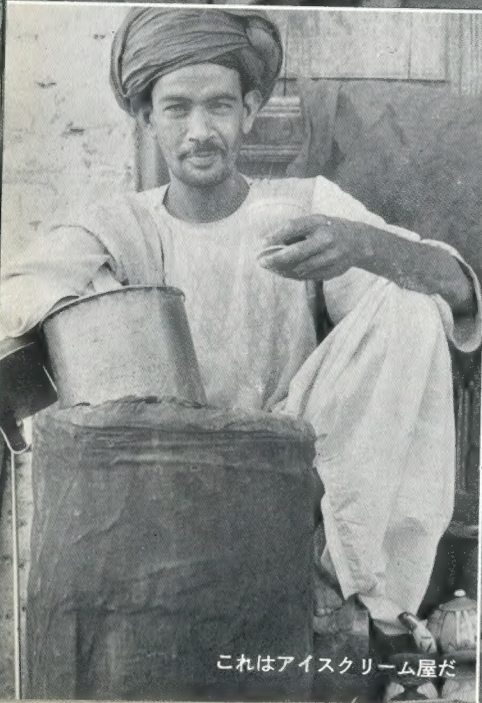
中庭にもまたバザールがある

庶民　ここでは、庶民とそうでない人とは一見して区別できる。頭である。ターバンをまいているのが庶民で、アストラカンの縁なし帽をかぶっているのは、多少とも上層階級に属する。あるいは、より近代化された階層である。役人、事務員、教師、学生などである。自動車の運転手もこのクラスにはいる。

小商人、労働者などはターバン組だが、労働者といっても工場はほとんどないから、雑役のようなことでもしているのだろうか。ちょっとした家なら召使の数人はおいている。家事使用人という職業は、かなり重要だ。もちろん男の職業である。あそびにゆく場所はきわめて少い。歓楽街は存在しない。食堂のようなものはあるが、飲み屋、バーはない。この国には、酒がないのだ。

アストラカン帽とターバン

子供用既製服屋．帽子もある

ラジオ屋．これは高級な職業だ

これはアイスクリーム屋だ

タコ屋．きわめて素朴なもの

清涼飲料水屋．味は知らない

商売いろいろ　バザールの店を一軒ずつ見て歩くとおもしろい。店は、一間きりの穴ぐらのようなのが多い。大てい住居は別で、夜は戸をしめて自宅に帰るらしい。ひととおりの日用品は売っている。軽工業製品ではホンコン製が目につく。マッチはソ連製。商人としてもアフガン族がはばをきかせている。アフガン族はパシトゥーン族、パタン族ともよばれる。もともと、アフガニスタンというのはアフガン族の国ということで、かれらはこの国の征服者である。じつにエネルギッシュな民族で、あらゆる方面で活躍している。一見サムライ気質で、商人には不向きのようにも思えるが、なかなかどうして、そうとうなものだ。すべてのパシトゥーンがそうだというのではない。よく「近江どろぼう伊勢こじき」などというが、この国でも特に商魂たくましい地方があって、そこの出身の人には、悪魔もだまされて金をしぼり取られた、という話がある。それでも、古来有名なインドやアラビアの商人にくらべると、ここの商人はどことなくのんびりしている。通貨はアフガニ。一アフガニは約十円。

石のカマを売る．石器時代？

女性　一ばんふしぎなのは女の風俗だ。カーブルは、男だけの都だ。女の姿が見えない。女がいないわけではないが、あまり外出しないし、出るときは頭からすっぽりと袋をかぶって歩く。目のあたりだけ、うすい布になっているから、中から外は見えている。まるで隠れみのだ。お客に招ばれて行っても、奥方は出てこない。ヒゲづらの召使がサービスする。さすがに子どもは顔を出している。子どもの顔を見ていると、なかなか美人が多い。せっかく年ごろになると、袋をかぶってしまう。下層階級や農村の女は、働かねばならぬから、かぶりものがいくらか簡単で、顔は出している。しかし、写真はとらせない。他人に顔を見せないのは、イスラムのおきてだそうだ。トルコ、イラン、パキスタンなども、昔はやはり袋をかぶっていたが、今はぬいでいる。アフガニスタンだけがかたくなに古い習慣を守っているのだ。ここでも、女子学生のあいだなどでは、廃止運動があるらしいが、けっきょく脱げない。イスラム法では、また、一夫多妻をみとめている。平等にあつかうなら、四人までかまわない。この国の男性には、一夫多妻制を弁護する人も少くないけれど、この国が近代化の方向に進んでゆく以上は、これもまたいずれは立向わねばならぬ問題だ。一般に女性の地位は大へん低い。女学校の先生と看護婦だけだ。女優、女給、女店員さえも許されない。

年ごろになると，みなこの通り

農村では布をかぶっても顔は出る

インテリ　文字の読める人はごく少い。地方では、まだまだ教育は普及しているとはいえないが、カーブルには一おう幼稚園から高校、大学まである。国立の学校は授業料はいらない。そのかわり、大学の卒業生は、インテリの登録をして、政府指定の職業につく。国立カーブル大学は、この国唯一の大学だが、法学部、文学部、理学部、医学部、およびイスラムの教理をおさめる

神学部がある。工学部、農学部はない。秀才は、卒業後どんどん外国へ留学させているようだ。戦前は日本へも何人かの留学生を送った。いまでは、その人たちがそれぞれかなりの地位になっていて、わたしたちを歓迎してくれた。この国では、知識階級の地位は高いが、責任も重い。近代化推進の選手である。

カーブルには幼稚園もある

カー[illegible]理学部化学[illegible]

地方勤務の[illegible]　ある宿場で

牧畜文化　生業からいうと、国民の大部分は農民である。コムギが主な作物だ。国旗にも、文部省のバッジにも、王様の正装のエリ章にも、コムギの束が描いてあるくらいだ。それでも、乾燥地帯のつねとして、生活の全般に牧畜文化の浸透がいちじるしい。農民も大ていは家畜を飼っている。一歩郊外へ出ると、ヒツジ、ヤギ、ラクダの群れがうろうろしている。家畜の皮を丸はぎにして縫い合せた皮袋が、いたるところで役に立っている。水入れにもなるし、中に空気を入れると浮袋にもなる。それをならべてイカダにする。食べものも、いちばんのごちそうはヒツジの肉だ。乳製品もよくたべる。カーブル郊外で、妙な袋を下げた百姓の群によく出会う。市民の消費するヨーグルトを、毎朝近郊農村から売りにゆくのだ。ヨーグルトは必需品である。

皮袋をならべてイカダを組む

最も壮麗な[illegible]ートの大寺院

イスラム教　日本なんかとはちがって、この国では宗教の力がおそろしく強い。宗教はイスラム教、つまり回教である。ほかのはない。イスラム教は国教だ。それは単なる個人の信仰の問題ではない。ここでは宗教は法律であり、道徳であり、社会組織であり、風俗習慣である。すべては聖なる書物コーランに定められたとおり運ばれる。一夫多妻も、酒のむなも、豚食うなも、みんなコーランにある。タバコのことは書いてないから、のんでもよい。コーランができた頃は、タバコはまだなかった。

[illegible]

ただ一つの神アラーを信じ、一さいの偶像をきらう。だから、お寺といっても御神体も仏像もない。がらんどうのお祈り場があるだけだ。しかし、お寺にはずいぶん立派なのがある。全面に色タイルがはめこんである。宗教は趣味の問題ではないだろうが、日本人の趣味には合いかねる。銭湯を連想する。

[illegible]

お寺の本堂だが御本尊はない

村の礼拝所で

お祈り　まず流れる水で身をきよめる。道ばたのみぞの泥水を、平気で口にふくむ。口を洗い、顔を洗い、手足を洗い、おしりをまくって洗う。お祈りは、西の方メッカを向いてする。礼拝所があればそこで、なければどこででもよい。布を地面に敷いて、くつをぬいで上る。立っておじぎをし、すわって鼻とおでこを地面にすりつける。これを何度もくりかえす。一ぺんのお祈りに十五分くらいかかる。これを、一日に五回くりかえす。大たいの時間はきまっているが、祈りは個人にかかわることだ。となりの人とシンクロナイズすることはない。坊さんに当るものはムラーという。賢者を意味する。ムラーでない庶民の一人ひとりにいたるまで、強烈な宗教的精神をもっているのに驚かされる。最近は、わずかずつ軟化しているようだ。お祈りをサボるモダン・ボーイも現れている。

水で身をきよめる

口をすすぎ顔を洗い足

カメラを見るのは始めてだ

あの外人た　どこへ行くのだろう

探検隊、奥地に向う　わたしたちの探検隊は、植物班と人類班にわかれていた。わたしは人類班に属していた。中央山岳地帯のどこかにいるというモンゴル人――この国ではモゴール族とよばれている――をさがすために、カーブルをたって、奥地に向う。ふたたびカンダハールを経て、ヘラートをまわり、そこからいよいよ山岳地帯に車をのり入れた。七月中旬のことである。遠い国から来た奇妙な外国人に対して、現地の人たちの示す好奇心はすさまじい。わたしたちはどこへ行っても、たちまち群衆にとりまかれる。日本でも、明治のころいなかに来た外人は、こんなふうだったかもしれない。何か困ったことがあれば、手だすけは立どころにいくらでも出てくる。べつに金をせがむでもない。概して純真、素朴で、正直だ。ものがなくなったりはしない。

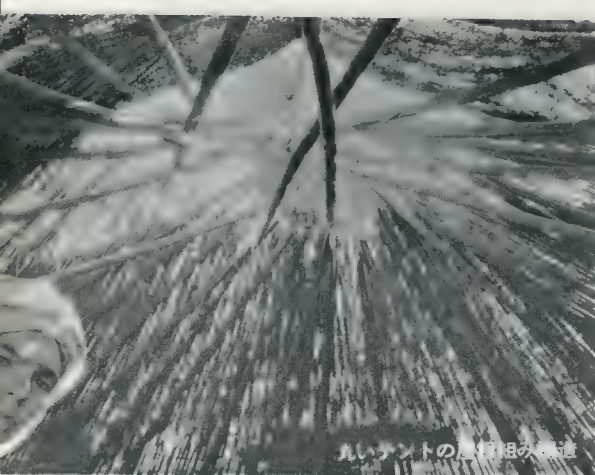
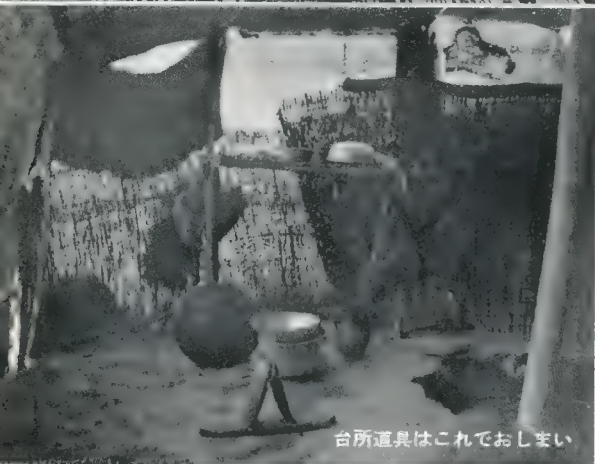
ゴラート地方　わたしたちが探しているモゴール族というのは、ひどい山の中の、ゴラートという地方に住んでいることがわかった。パシトゥーン族やトルコ族にかこまれて、どうしてこんなところにモンゴル人の片われがいるのだろうか。おそらく、ジンギスカンのころの西征軍の一部が、モンゴル帝国の崩壊ののち、山の中に逃げこんで、「平家の落武者」部落のような形でのこったのだろうと思われる。いまでもモンゴル語の一方言を伝えているのだ。

ゴラート地方というのは、ずいぶん山奥だった。自動車は、タイワラ城までしか入らない。あとは馬で行った。荷物も馬につんで運んだ。カサカサに乾いた高原だった。三千メートル前後の峠をいくつか越えた。温度はさほど高くないが、日射しが強いのに参った。ターバンの端は、日除けの役に立つ。

ラート中

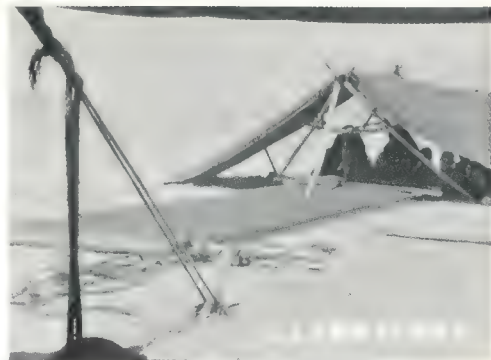
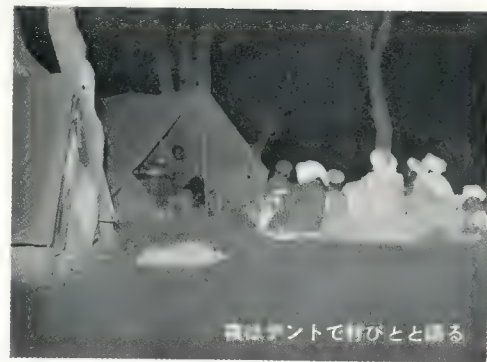
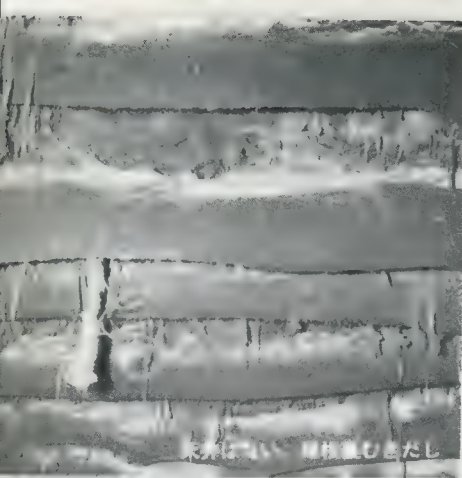
タイマニ族の部落　谷間のオアシスには村があった。しかし、わたしたちの探すモゴール族ではなく、タイマニ族という部族だった。かれらは、西北アフガニスタンの山間部一帯に住む「四部族連合」の一部族で、トルコ系といわれる。農耕民にはちがいないが、遊牧的要素もとり入れている。冬は、泥れんがをつみ上げた小さい家に住んでいるが、夏は、テントを持って刈りとった耕地の上を転々と移動する。そこで家畜を飼う。落すフンが肥料になる。

黒いテント　ヤギは山岳民の大せつな家畜だ。ミルクをしぼり、毛を刈る。ヤギの毛で織ったテント地の、黒かっ色のぶきみな色は、あたりのオレンジ色の地面と強いコントラストをつくって、印象的である。テントの形式にはいろいろある。四角いのはタイマニ特有で、丸いのはモンゴル系文化である。

テントの中　テントは目のあらいホームスパンのような生地だから、光もとおすし、風通しもわるくない。雨は降らないから、心配ない。テントの一ばんの効用は、日かげをつくることだ。テント地を織るには、おそろしく原始的な織機がある。織り手は、織り進むにつれて移動するしかけの小テントの中にいる。織っているのはお母さんだろう。そのそばに、小さな頭が二つ三

つならんで見えた。テントのすそまわりには、すだれのようなものが張りめぐらしてある。床は土間のままで、まん中に炉がある。人のすわるところには、フェルトの敷きものを敷く。夜具は片すみに積み上げる。女はお客に顔を見せない。わたしたちがテントに入るまでに、どこかへ逃げてしまった。

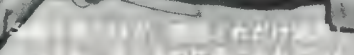
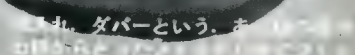
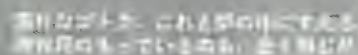
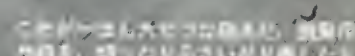
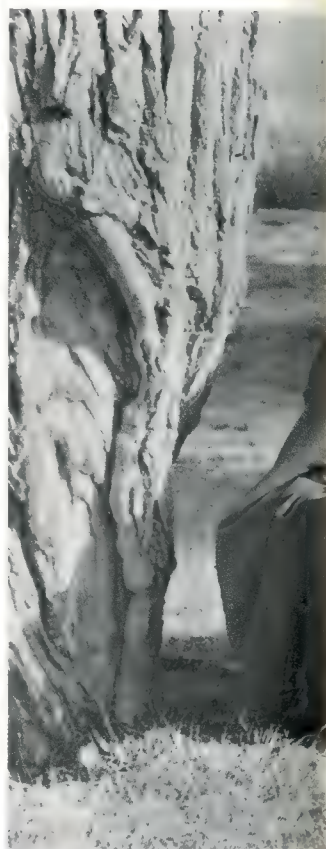
台所道具はこれでおしまい

モゴール族の部落に着く

モゴール部落に着く　わたしたちはとうとうモゴール族の部落にたどりついた。そこは、ジルニーという村だった。ここまで一しょに来た一行五人のうち、三人は都合で先に帰った。わたしたち二人と通訳とが後にのこって、研究をつづけることになった。わたしたちは、村はずれのアンズの森の中にテントを張って、仕事をはじめた。ことばを記録し、かれらの生活を調べる仕事だ。

ジルニーの村は、大きな岩山のすそにあった。百戸ばかり泥の家がたちならんで、数百人のモゴール族が生活していた。かれらも、タイマニと同じように、夏はテントで暮しているものが多い。まわりは岩と砂漠の荒涼たる環境だが、ここだけはいくらかは水もあり、ポプラやアンズの緑のしげみがあった。

モゴール族の生活　せっかくここまで来たが数十年おそすぎた。モゴール族の日常語は、いまではペルシャ語だ。モゴール語は、数人の老人がわずかに記憶しているだけで、消滅寸前であった。衣食住にわたって、古いモンゴル文化を保存しているかと期待していたのだが、そういうものは何もなかった。中央アジアを駆けめぐった、ジンギスカン軍の戦士のおもかげは今はない。ムギ畑とわずかな家畜をたよりに、ほそぼそと暮す平和なイスラム教徒にすぎない。かれらは、自分たちの手では、ほとんど何もつくれなくなっている。農具も、台所道具も、着物も、くつや帽子にいたるまで、みんな外から入ってくる。雑貨は、ヘラートやカンダハールから行商人が売りにくる。近くにあるタジック族の村には鍛冶屋がいて、草刈りのカマやスキなどはそれにつくってもらう。家だってそうだ。タジックの大工に建ててもらう。穴ぐらのように中はうすぐらく、家畜小屋とかわらない。臭いし、ノミがいっぱいいる。じっさい、家畜と同居している場合もある。これでも、この数十年間によほどましになってきたのだそうだ。同じ人間でも、こんな生活もある。

皮袋の水がめ　水は表面にしみだして蒸発するので　中は意外に冷えている

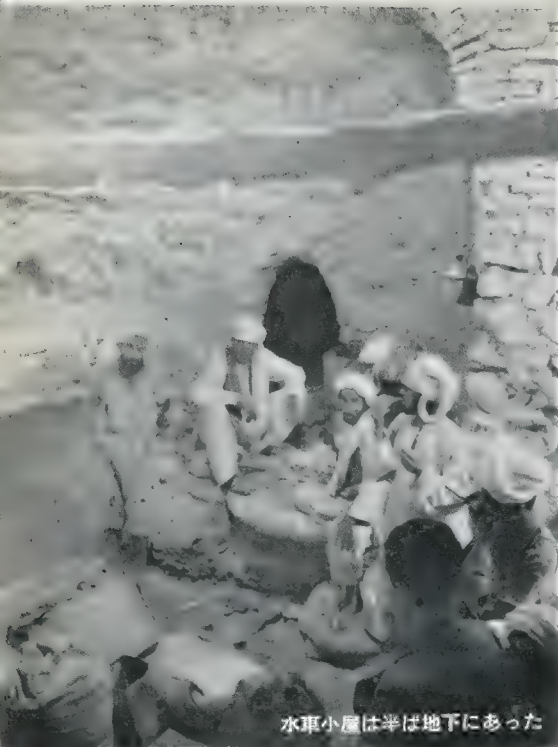
花嫁は式場で純白の新しい着物と着かえる

モゴールの婚礼　村で結婚式があるというので、お客におしかけた。花婿さんは四十すぎのヒゲづらだった。花嫁さんは二十ばかりの娘さんらしい。らしいというのは、花嫁さんは姿を見せぬからだ。おどろいたことには、ここでは新郎と新婦は別々の結婚式場で式をあげるのだ。わたしたちが行ったのは男の式場で、参列者も男ばかりだ。

ここももちろん一夫多妻である。この花婿さんは三度目の結婚だそうだ。男から女に、かなりのお金が贈ってある。女の方から、お使いが嫁入道具をもって来て、積みあげた。じゅうたんやふとんなどである。式がすむと、花婿は女の式場へ行って、花嫁を馬にのせ、手綱をとって、テントへ連れて帰った。

遊牧民　モゴール族は昔は遊牧民だったが、いまは農民である。遊牧民は別にいる。パシトゥーン族だ。パシトゥーン遊牧民は、冬は暖い平地に住み、夏は涼しい山岳地帯にやってくる。家畜を追いながら、すこしずつテントを移動してくるのだ。中には、商品をもって来て、山地の農民あいてに商売するのもいるし、土地を買って農民に小作させている不在地主もいる。収穫期にやって来て、年貢をとる。農民との関係は表面は友好的だけれど、いろいろ利害の反する点があり、裏面では反目している。遊牧民たちは、陽気で、にぎやかで、活動的である。かれらのテント村は、いつ行っても活気がみなぎっている。子どもの数も多いようだ。

タイワラ城のお祭り　わたしたちは、八月の終りにジルニーの村をひきあげた。タイワラの城まで帰ってきたとき、ちょうど一年一度のお祭りにいきあった。お祭といっても、宗教的なものではない。アフガニスタンが英国の侵入軍を撃退して、独立を回復した記念日である。こんなへんぴな山奥でも、中央政府からの来賓を迎えて、さかんな祝典があった。式は、勅語奉読、東方よう拝にはじまる。王宮のあるカーブルは、東の方だ。勅語は総督が読んだ。

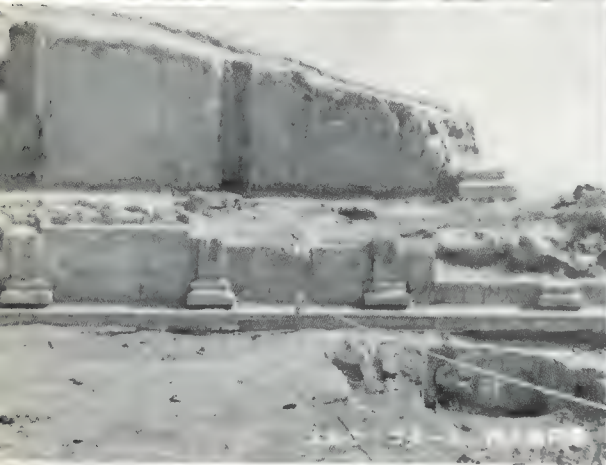
いつもは人の姿をまるで見かけぬさびしい所だが、この日ばかりは、どこから出てきたのかと驚くばかりの、大へんな人出だった。やっぱり女は一人も出てこない。式後、余興があった。おどりと、アクロバットと、競馬と、すもうである。これが三日つづいた。対抗試合がもめて、最後は流血の惨だ。

水車小屋は半ば地下にあった

水平[illegible]うす．[illegible]

ヘラートに帰る　タイワラ城から、シャーラックまでは、また馬の旅だった。そこでやっとトラックをつかまえて、ヘラートに帰った。まる二ヵ月ぶりで電灯を見た。ヘラート近くのハリ・ルード河の沿岸は、豊かな耕作地帯で、タジック農民が多い。ゴラート地方からは、約八十年前に、モゴール族が大挙して移民して来たので、モゴールの部落もあちこちにある。だから、ヘラートに帰ってからも、わたしたちの仕事はまだつづいていた。

水車小屋　ヘラートに近いモゴールの村を調べに行ったとき、大きな水車小屋があったのでのぞいて見た。半分地下室で、天窓からのわずかな光の中に、たくさんのターバンがうごめいていた。「開け！　ゴマ」の一場面みたいだった。水車は水平にまわるひきうすで、ぶんぶんまわっていた。コムギを粉にひいている。この形式の水車の分布は広い。アフガニスタン全土これだし、カラコラム隊の写真を見ると、フンザでも全くおなじである。

世間話と糸つむぎ．タジ[illegible]

三蔵法師はここにも来た

遺跡　この国には、あちこちに古い遺跡があって、わたしたちも一周旅行の途中、そのいくつかを訪れた。歴史の古い土地で、紀元前三百年のころから、ここにはギリシア人のバクトリア王国があった。バルフやベグラムはそのあとである。スルフ・コタールというところでは、フランスの学者たちが、拝火教の神殿らしいものを発掘していたが、それはバクトリア時代につづく月氏民族のクシャン王国時代のものだろう。その後仏教が入って、七世紀に三蔵法師がインドへの途中にこの国を通ったときには、バーミアーンにはすばらしい仏教王国がさかえていた。**大唐西域記**にしるされた大石仏は、いまものこっている。その後回教徒の侵入があり、いくつもの王朝の興亡があった。十三世紀、ジンギスカン軍が攻めこんできて、バルフも、バーミアーンも、みんなひどい破壊をこうむった。ゴラート地方では、正体のわからぬ廃虚をたくさん見つけたが、モゴールの祖先がつくったのか、もっと古いか、よく判らない。

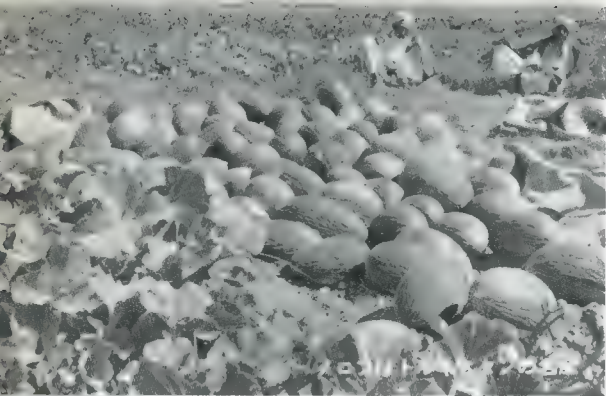
ハザーラのインテリ

ウズベックの商人

アフガニスタンの諸民族

旅行中いろいろの民族に出あった。この国は、民族構成の複雑な国だ。いちばん数も多いし勢力があるのは、パシトゥーン族だ。王様もそうだし、政府の高官も大ていこの民族だ。商人も農民も遊牧民もある。体格は堂々として、顔つきも立派である。ヘラート方面および山岳地帯に点々とタジックというのがいる。昔の中国の大食人の語源になった民族だ。この二つはインド・アーリアン系である。モゴール族はもちろんモンゴル系統だが、そのほかに中央山岳地帯にはハザーラ族というのがいる。これも顔つきはモンゴロイドだが起源はわからない。タイマニ族をふくむ四部族連合は、トルコ系だといわれている。トルコ系の民族の本拠はトルキスタン地方だ。ソ連領のトルキスタンとは地つづきで、ウズベック族とトルコマン族が住んでいる。商人にはウズベックが多く、遊牧民はトルコマンが多い。そのほか、ヌリスタニとかワハニとか、系統もよくわからぬような少数民族がいろいろいる。すこしだが、アラブも住んでいる。ことばの種類も多いが、ペルシャ語なら大てい通じる。

絹の道　ヘラートでステーション・ワゴンを一台やとい、それでカーブルまで帰ることにした。来るときは南まわりだったから、今度は北まわりにした。パロパミサス山脈を北に越えると、トルキスタンの平原である。昔の「絹の道(シルク・ロード)」はここを通っていた。シルク・ロードというのは、大昔からの、東洋と西洋をむすぶ交易路である。これを通って、アジアの絹がヨーロッパへ行った。最初のヨーロッパ人として、マルコ・ポーロがペキンに来たのも、この道を通ってきたのだ。かれの旅行記には、このあたり、アフガニスタン領トルキスタンのことが出ている。七百年たっても、大して変らぬようだ。自動車で通れるけれど、場所によるとひどい砂でしばしば座礁する。そばを「砂漠の船」ラクダのキャラバンが、ゆうゆうと追いぬいてゆく。

バザールの店先に

トルキスタンの農業　アフガニスタン領トルキスタンは、意外に豊かな土地だった。砂漠や草原もあるけれど、村も耕地もたくさんあった。人口も多く、むしろ全アフガニスタンでも、いちばん生産力が高いのではないかと思った。丘陵地帯では水なしの乾燥農業が発達し、平原部では縦横に農業用水路が走っていた。コムギのほかに、ワタの畑も多い。トルコ語の発音が、耳新しく聞こえる。

メロン　マルコ・ポーロの旅行記を見ると、水のない砂漠をこえて、サプルガンの町につく、とある。物資豊かで、世界最良のメロンがあるという。いまのシバルガンのことだ。わたしたちも同じ経験をする。畑にはすばらしいメロンができている。スイカぐらいの大きさだ。スイカもある。畑でとれたメロンは、ラクダのキャラバンが町へ運んでゆく。わたしたちも水筒がわりにたくさん買込む。

中庭に穀物をつみ上げて、取引する

ここではロバもチャパンを着る

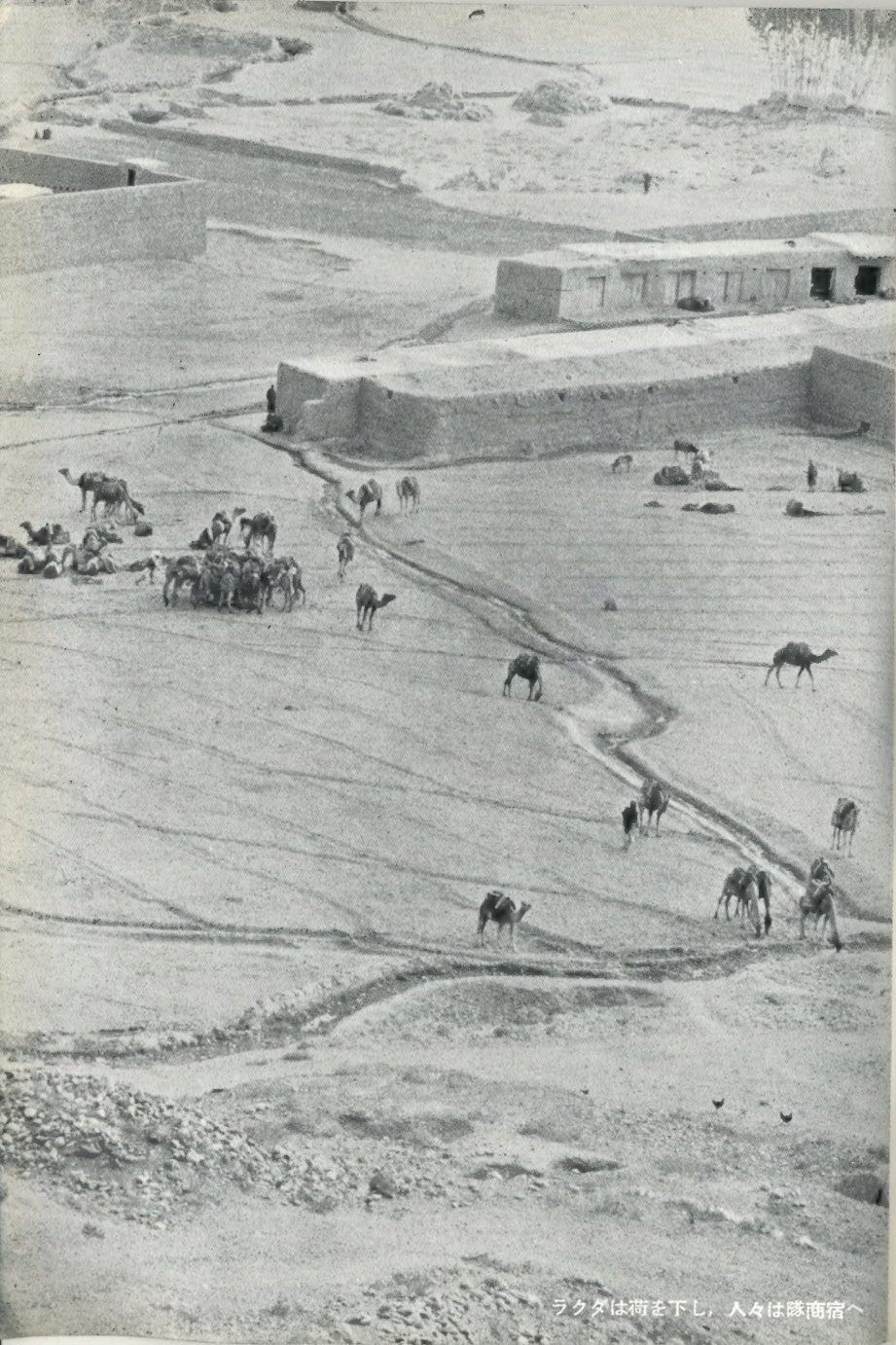
トルキスタンの町　シバルガンやアクチャは古い町だ。バルフなんか、昔はすばらしい都会だったらしいが、オクスス河すなわちアム・ダリヤを渡って攻めよせたモンゴル軍のために、見るかげもなく破壊されてしまった。いまでは、マザリ・シェリーフがこの地方の中心的都会である。ここには、大へん立派なイスラム寺院があるので有名である。異教徒は入れてもらえない。屋内バザールを見に行った。通路の上は全部屋根でおおわれて、昼間でもずいぶん暗い。両側にぎっしり店があって、呉服屋だけで何十軒と並んでいる。

マザリ・シェリーフのイスラム寺院

店先には大ていチャパンの既製品がぶら下っている。その長い綿入れオーバみたいなものだ。縦じまのが多い。これを肩にひっかけるのは、今は全国にひろがっているが、もとはこの地方の習慣らしい。じゅうたんを売る店も多い。草原のトルコマンの家内工業である。アストラカンも、ここが本場だ。

軒なみに呉服屋だ

アクチャのバザール

仕立屋の親方はウズベック人だった

ラクダは荷を下し，人々は隊商宿へ

隊商宿と茶店　トルキスタン地方からカーブルにゆくには、ヒンズークシ山脈を越えなければならない。三千メートルの大きな峠がある。昔からの交通路で、三蔵法師もこのあたりを越えて、インドに行ったのだ。今ではトラックが通うが、歩いてゆく旅人もたくさんある。がらんごろんと鈴をならして、ラクダのキャラバンが通る。宿場々々には、そういう人たちのために、隊商宿がある。

街道すじなら、食べるものには不自由しない。大ていの町には、飯屋があり、茶店がある。土の家だから、見かけは悪いが、思うほど不潔ではない。パンと羊料理、あるいは油でたいた米の飯をくわせる。茶店は、チャイ・ハーナという。ハーナは家のこと。紅茶も緑茶もある。緑茶の方が上等らしいが、日本の茶のことを思えば飲めたしろものではない。茶碗や茶びんはどこでも日本製だった。

青空喫茶店．村の巡査とお茶をのむ

飯屋で米の油炊きを食う．手づかみ

チャイ・ハーナでは水タバコも出す

十月はじめ、わたしたちは三ヵ月ぶりにカーブルへ帰った。これでアフガニスタン一周旅行を終ったわけだ。まだ、ハザラジャートやヌリスタンなど、見のこした地方も少くないが、それはまた次の機会にしよう。親切だったこの国の人たちに感謝しながら、わたしたちはハイバル峠に向った。

アフガニスタン旅行中，何を食べていたのかとよくきかれる．大ていはナンをたべていた．パンの一種である．コムギの粉を水でこねてわらじの形にのばす．それを火の入ったかまどの内側の壁にはりつける．しばらくするとこんがり焼けて出てくる．パン種もふくらし粉も入っていない．正直のところうまくない．

岩波写真文庫目録

既刊

1 木綿
2 昆虫
3 南氷洋の捕鯨
4 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19 川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大佛
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 佛像
43 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47 東京—大都会の顔—
48 馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54 水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65 ソヴェト連邦
66 能
67 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97 システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殼
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジュロ
104 空からみた大阪
105 宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 寫楽
111 熊
112 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 佛教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曾
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本—1955年10月8日—
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る

新刊

200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県

近刊　ブラジル　ルーヴル美術館　北海道(南部)—新風土記—

B6判　64頁　写真平均200枚　定価 各100円

タイマニ族の子供たち